

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	藤井 健吉 (ふじい けんきち) 花王株式会社安全性科学研究所
② 立候補の理由と 抱負 (400 字程度)	リスク学は学際的な学問であると同時に、強い実学志向性を有しています。わたしは「ものづくり」分野でリスクアセッサーを務めています。この分野のリスク評価の進歩には常々驚きと敬意を抱いています。10 年前、20 年前と比較して、圧倒的な質・量の違いがあります。より高いリスク評価技術を投入し、望ましいレベルの製品安全を実現するべく、解決志向性のリスク評価・リスク管理が実用化されています。ものづくりの現場からリスク課題を解決していくことが、よりよい社会の実現に繋がる、そう考え続けて PDCA サイクルをたゆまず回した成果なのではないかと思っています。他の分野でも、リスク課題を解決対象と捉えて、評価と低減化を続けてきた分野であれば、同様ではないでしょうか。リスク学の社会的な一側面として、実学分野で実証・検証・修正されてきた歴史があるのです。 私たちのリスク研究学会は、現在「リスク学事典」の大編纂を進めており、学問体系の見える化、課題の共通項の抽出、将来展望を事典的に提示しようとしています。10 年に一度の大会、産学官を挙げてリスク学の体系化に向けて叢智を結集する時です。分野横断的な事典だからこそ、各分野のベストプラクティスを持ち寄り、難しいリスク課題から目を背けず、智に駆動された社会の実現に向けた未来志向の事典を編纂できればと願います。
③ 本学会における 活動歴	● 日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループ(TG)の発起人として、第 1 期 (2013-2016)、第 2 期 (2016-) の共同代表。TG の課題は「従来のリスク学体系のレギュラトリーサイエンスの枠組みへの再配置」。より意思決定に資するリスク学のあり方を検証中。 ● 年次大会企画セッション座長として「規制ガバナンスの核心-根拠に基づく意思決定プロセスの事例と潮流- (2014)」、「化学物質管理のレギュラトリーサイエンス-実践的研究 (2015)」、「化学物質のリスク評価・管理における多面的な役割-新たなリスク研究の方向性と可能性- (2016)」、年次大会の口頭発表 5 件。 ● リスク研究学会誌査読論文「レギュラトリーサイエンス(RS) のもつ解決志向性とリスク学の親和性 ～薬事分野・食品安全分野・化学物質管理分野の事例分析からの示唆～. 2017;27(1).」、「化学物質のリスクを中心としたレギュラトリーサイエンスの事例解析 ～日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループ活動報告～. 2016;26(1):13-21.」など。 ● 「リスク学事典」編集アドバイザー、リスク研究学会奨励賞、認定リスクマネージャ。
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	北大院医修了、博士(医学)。理研脳総研、遺伝子病制御研究所、北大院医助教として疾患制御のリスク研究、花王安全性科学研究所にて主任研究員として製品原料の

	スク評価研究を担う。多数の国際機構 (ILSI, ACSB, Codex, ACI, Cosmetics Europe, CGF, etc) でグローバルなリスク課題の評価・解決・ガバナンスデザインに従事。
--	---

(書式2) 【推薦者用】

① 推薦する候補者 名	藤井 健吉氏
② 推薦者の 姓名と所属	岸本 充生 大阪大学データビリティフロンティア機構
③ 推薦理由 (400 字程度)	藤井氏は、北海道大学で医学分野の疾患制御研究教育を担った後、2009 年より花王株式会社の安全性科学研究所に移籍。ものづくり現場で安全性評価の経験を積み、食品・消費者製品・化学物質のグローバル規制に対応できるリスクアセッサーとなりました。数多くのリスク評価書を執筆し、関連する分野のガイドラインを作成、REACH 等の国際的な化学物質審査の実務を経験し、国際会議での議論を科学的にリードする一方で、遺伝毒性発がん物質の新しいリスク評価の考え方である MOE アプローチの開発と日本への紹介で重要な役割を担い、本学会年次大会でも発表しています。このように、学術面と実務面の双方を股にかけて活躍するリスクアセッサーは日本では珍しい存在です。加えて、本学会レギュラトリーサイエンタスグループの共同代表の一人として、レギュラトリーサイエンスの現場を知る立場から概念整理や分野間比較などを着実に推進しています。リスク研究学会の学際的发展のためには産業界・国際視点も重要です。理事として藤井氏を推薦いたします。